

美術部会 研究の構想（案）

令和4年度～6年度

I 研究主題

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成するための学習指導はどうあればよいか。
—美術科の特質や学習過程を踏まえたICTの効果的な活用—

II 主題設定の趣旨

令和元年度からの3年間は、学習指導要領が改訂されたことを受け、美術科で育成する三つの資質・能力に焦点を当てて研究を行った。初年度は「知識及び技能」、2年度は「思考力、判断力、表現力等」、3年度は「学びに向かう力、人間性等」に重点を置き、それらを相互に関連させながら確実に育成できるよう研究を重ねてきた。授業づくりにおいて、「何をさせるのかではなく、何を育てるのか」という観点から指導の工夫や改善を図ることにより、生徒が造形的な視点についての理解や美術作品に対する見方や感じ方を深めたり、心豊かに発想や構想をしたりすることにつながった。また、1人1台端末の環境が整ったことで、ICTを効果的に用いた学習活動の充実が急務となり、作品やワークシートの共有、アニメーション制作、振り返りの蓄積等、様々な取組がみられるようになった。

学習指導要領総則において、情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力の一つであると位置付けられた。ICTを日常的に活用することが当たり前の中で、社会で生きていくために必要な資質・能力を育むためには、学校の生活や学習においても日常的にICTを活用していくことが不可欠である。美術科では、これまでも写真、ビデオ、コンピュータ等の映像メディアの積極的な活用を進めてきた。さらに、1人1台端末を効果的に活用することで、教科における「主体的・対話的で深い学び」へとつなげることがより可能となる。

そこで、令和4年度からの3年間は、美術科の特質や学習過程を踏まえたICTの効果的な活用について研究を進めていきたい。容易な試行錯誤、情報の蓄積や過程の可視化、双方向性というICTの特性や強みを生かし、個別最適な学び及び協働的な学びの充実を図りたいと考える。さらに、ICTの活用を通じて、創造することの価値を捉え、自己や他者の作品等に表れている創造性を尊重する態度や、美術文化の継承、発展、創造に向かう態度の育成にもつなげたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成するために、美術科の特質や学習過程を踏まえたICTの効果的な活用について、3年間の継続的な研究を通して研究主題に迫りたい。

2 研究内容

- (1) 1年目 「A表現」におけるICT活用に関する研究
「生徒一人一人の個性やよさを生かす観点から」
 - ・発想や構想の場面におけるICT活用
 - ・写真、ビデオ、コンピュータ等の映像メディアを用いた表現におけるICT活用 等
- (2) 2年目 「B鑑賞」におけるICT活用に関する研究
「生徒一人一人の見方や感じ方を広げたり、深めたりする観点から」
 - ・インターネットを用いた情報収集等、調査活動におけるICT活用
 - ・発表や話し合い等、グループ学習におけるICT活用 等
- (3) 3年目 「評価」におけるICT活用に関する研究
「生徒一人一人の学びを指導に生かす観点から」
 - ・デジタルポートフォリオ等のICT活用
 - ・ICTを活用した評価の在り方 等

美術部会 令和6年度研究計画（案）

I 研究主題

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成するための学習指導はどうあればよいか。

—美術科の特質や学習過程を踏まえたICTの効果的な活用—

II 主題について

美術科においては、ICTを活用する学習活動と、実物を見たり、実際に対象に触れたりするなどして感覚で直接感じ取らせる学習活動とを、題材のねらいに応じて吟味し、効果的な指導を行うことが重要とされている。そこで「主体的・対話的で深い学び」の視点から、美術科の学習活動をより充実したものとし、さらなる資質・能力の育成へとつなげていくため、令和4年度より3か年計画で、「表現」「鑑賞」「評価」の3つの観点から、美術科におけるICTの効果的な活用について研究を進めている。

1年目の「表現」におけるICTの効果的な活用についての研究に続き、2年目は「鑑賞」におけるICTの効果的な活用について研究を行った。制作過程での相互鑑賞においては、プレゼンテーションソフトを使って自分の作品について発表し合うことで、他者の表現の工夫を具体的に感じ取ることにつながった。その際、制作過程を写真として記録しておいたものを掲載することで、より制作意図や工夫が伝わりやすいものとなった。美術作品の鑑賞においては、ICTを用いることで、生徒が詳しく見たい作品を選択したり、部分を拡大したりしながら、主体的に鑑賞を進めることができた。また、ICTを活用して作品に対する自他の思いや考えを共有できるようにすることで、他者と意見交流を図りながら見方や感じ方を深めている姿がみられた。このように、「鑑賞」におけるICTの実践でも、授業のねらいや展開、場面に応じて適切にアプリケーション（ソフトウェア）を選択し活用することで、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めることにつながったと考えられる。

3年目は評価におけるICTの効果的な活用の研究を行う。主な活用例としては、ポートフォリオの作成が考えられる。生徒が発想し構想を練ったり、技能を働かせて表現したりしたことは、制作が進む中で徐々に具体的な形となって現れるものである。そこでICTを活用し、適宜、制作途中の作品や試作、スケッチ等を生徒に写真データとして保存させ、生徒と教師でデータの共有化を図る。このことにより、教師は授業で見取ったことと合わせて、生徒一人一人の学びの状態を評価し、生徒の学習改善につながる指導をより細やかに行うことができる。一方、生徒はこれまでの試行錯誤の過程を確認することで、より細かく自分の学びを分析、検証できるため、新たな発想や構想、技能の高まりや改善点に気付いたり、自分の学習成果を実感したりできる。また、個々のポートフォリオを他者と共有し、互いの学習成果を評価し合えば、個人の見方や感じ方を深めることにつながられる。ICTを活用した評価が表現や鑑賞の活動の効率化だけでなく、個々の学びの深まりにおいても有効なものとなるようにしていくことが大切である。

III 研究内容とその視点

資質・能力の育成、学習時間の効率的な運用の観点で、ICTと非ICTの選択と組合せを検討しながら、次の1から3の研究を行う。

1 美術の各領域及び〔共通事項〕の内容に関する研究

- (1) 発想や構想及び技能に関する資質・能力を育成する指導内容を工夫する。
 - ・感じ取ったことや考えたこと等を基に、絵や彫刻等に表現する活動
 - ・目的や機能を考え、デザインや工芸等に表現する活動
 - ・発想や構想をしたこと等を基に、見通しをもち創意工夫して表現する技能を育成する活動
- (2) 鑑賞に関する資質・能力を育成する指導内容を工夫する。
 - ・美術作品等の見方や感じ方を深める活動
 - ・生活や社会の中の美術の働きや美術文化についての見方や感じ方を深める活動

- (3) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、〔共通事項〕を身に付けることができるよう指導内容を工夫する。
- ・形や色彩、材料、光等の性質や、それらが感情にもたらす効果等を理解する活動
 - ・造形的な特徴等を基に、全体のイメージや作風等で捉えることを理解する活動

2 指導計画・指導方法に関する研究

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。
- ・題材等の内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の工夫
 - ・造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実
- (2) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導について相互の関連を図る。
- ・各内容における指導のねらいを実現することのできる題材を、育成する資質・能力が系統的に身に付くように位置付けた指導計画の作成
 - ・発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を総合的に働かせて学習を深められる指導計画及び指導方法の工夫
- (3) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導に〔共通事項〕を位置付ける。
- ・〔共通事項〕を造形的な視点を豊かにするための知識として表現及び鑑賞の各活動に適切に位置付けた指導計画の作成
 - ・小学校図画工作科の〔共通事項〕を踏まえ、形や色彩等に対する豊かな感覚を働かせて表現及び鑑賞に取り組める題材や学習過程の工夫
- (4) 「A表現」について、(1)のア及びイと、(2)を関連付けて指導する。
- ・描く活動とつくる活動を通して、表現に関する資質・能力を伸ばし、様々な美術表現に親しめる調和のとれた指導計画の作成
 - ・発想や構想に関する資質・能力と創造的に表す技能とが関連し合うことで、相互の資質・能力が一層高まるような指導計画及び指導方法の工夫
- (5) 「B鑑賞」について、時間を適切に確保する。
- ・鑑賞と表現との関連を考えて鑑賞の指導を位置付けたり、独立した鑑賞を適切に設けたりするなど指導計画の工夫
 - ・生徒や各学校の実態、地域性等を生かした効果的な指導方法の工夫
 - ・造形に関する言葉を意図的に用いて説明したり、話し合ったりする活動の設定

3 評価に関する研究

- (1) 創造活動の喜びを感じられるような指導のための学習評価を工夫する。
- ・自己の表現を振り返り、活動のねらいに基づき、成果と課題を見いだす自己評価
 - ・互いのよさを認め尊重し合う相互評価
- (2) 指導の改善を図り、資質・能力の育成に生かす評価を工夫する。
- ・一人一人の学習状況を把握し、その都度、個別指導に生かせる評価方法
 - ・育成したい資質・能力を明確にし、学習の成果が確認できる評価資料の累積と活用方法
- (3) 効率的、効果的な評価方法を工夫する。

IV 研究方法

- 1 研究計画に基づいた実践を持ち寄って協議し、情報交換をして研究を進める。
- 2 研究の成果を日常の教育実践に生かすとともに、研究の継続と累積に努める。
- 3 中教研の組織を十分に生かす共同研究にし、会員の総意を結集した研究になるように努める。
- 4 小学校との情報交換に努め、互いに連携を深める。
- 5 実技研修会や研究会に積極的に参加するなど、教師としての資質・能力を高め、感性を磨くよう努める。

